

阿波の農村舞台に 新しい生命を

四国大学
大和武生

阿波の農村舞台は、村民たちが仲間として結束した姿の象徴として見る事ができる。阿波の村々に農村舞台(定舞台)建設され始めたのは幕末期であった。そのころ農民たちが重視しなければならぬ場所が、村には三ヶ所あった。

第一は、庄屋さんの屋敷である。ここでは、藩への願いごとを取りまとめたり、藩からの通達を取り次いだりする行政の拠点であった。また農民の年貢などが滞ったりすると藩役人が出張してきて厳しく催促する「恐れ多い場所」であった。

第二は檀那寺である。ここは先祖の法要を営んでくれる聖なる場所であるが、現実的にはキリシタン宗禁制が続いた江戸時代では、村人としての身分を保証し旅手形を発行してくれる村役場であり、旅券センターであった。これも村人にとっては少し窮屈な場所であった。

第三の場所は、村の鎮守の神社である。江戸時代の神社には、神職はほとんどいないで、近くのお寺の僧侶が管理を任されていた。いわゆる神仏混淆である。常には管理人がいないから、農民にとっては最も気楽な公共の場所であった。神社では春秋に祭祀が行われた。春には、その年の豊作を祈願する祭であり、秋には豊作を感謝する祭であった。また夏にも祭りが行われたが、夏祭は不幸な運命で死んだ英雄の霊を慰める祭であり、合わせて悪い病気が流行らないようにと祈願する祭りであった。三つの祭礼とも農民の生活に密接に関連していた。

祭礼に際して農民たちは、米・酒・野菜・果物・

魚など出来る限りの供え物をした。また祭神に喜んでいただくため、歌・踊りなどの芸能をも奉納した。奉納した芸能が祭神に受け入れられたか、喜んでいただいたかの判断は、生身の人間がいかにも楽しんだかどうかで判断するしかなかつた。奉納芸される場に立ち会った農民の感動が大きければ大きいほど、祭神が受け入れてくれたことになる。祭神の感動の深さは、豊作として農民に返礼されるはずである。農民たちは奉納芸をそんな風に考えて、農作業の合間に一生懸命に芸能の練習をした。

時代が進むにつれて、単純な奉納芸では祭神も満足しないだろうと村人も思うようになった。それは江戸時代の人々が、芸能への感覚が深化した結果である。自分でも単純な歌や踊りでは満足しないのに、神社の神さんが満足するはずがないと思うようになった。こうして奉納芸は、単純な盆踊りから、当時、庶民に最も人気あつた人形芝居へと移っていった。しかし、淡路島から専門の人形座を呼んで操り芝居を、春夏秋の祭礼ごとに行うほどの経済的余裕は、村々にはなかった。

それでは複雑な人形操りを、村人たちで稽古して祭礼時に神さんに奉納しよう。稽古するためには常時稽古する場所がほしい。こうして村人たちは安上がりな奉納芸を練習するため、定舞台(農村舞台)を作るようになった。

農村舞台の建設には、全村人の協力が必要であった。金の出せる人はお金を、材料を提供できる人は材木や建材を、力のある人は労力を、大工や左官の技術のある人は技術を出し合つて建設した。建設場所は、昔から村の共有地である神社の境内に作られた。

こうして建設された農村舞台(定舞台)は、所有権の上でも、精神的にも、氏子(村人)全体のものであった。定舞台は、神へ奉納する晴れ舞台であり、練習場であるのはもちろんのこと、村の

いろいろな寄り合い場でもあった。田植えの打ち上げの宴会場として、採め事の手打ち式の場としても使用されたろう。またあるときは一揆の打ち合わせの場であったかもしれない。まさに村人たちの生きた結末の象徴であったに違いない。

現代の人々は、過去数十年間、工業発展ばかりを追うけて日本人の原風景を忘れたような生活を送ってきたのではないだろうか。平成のいま、過去の日本人の知恵をしつくりと考えてみよう。そこにはきつと新しい発見があると確信する。



農村舞台との出会いと 復活公演

林 茂樹

今から二十年ほど前、建築士会で当時は若手だった私たちが中心になり「阿波のまちなみ研究会」を結成した。目的は、徳島に住む建築士として地域の歴史、風土さらには文化に根ざした建築の創造活動のため「地域」の歴史をわれわれ自身が学ぶことから始める、との認識から設立した。

前年から参加していた阿波学会総合学術調査の建築班調査メンバーが中心であった。私たちが参加した阿波学会の最初の調査から二年目のその年の調査対象は羽ノ浦町であった。

当時の顧問をしていたいた故四宮照義先生から、那賀川流域には農村舞台が多く存在していたとお話しを聞き、期待して探したが一棟も見つからず、もう舞台はすべて廃絶されてしまったものと諦めてしまった。

また、その年から研究会の全体プロジェクトとして協町の町並み調査に全力を傾けることとなり、しばらく農村舞台のことは会の話題から遠のいてしまっていた。

それから石井町、海部町、板野町と調査は続いたが、この町村にも農村舞台は見あたらずなかつたため、頭から農村舞台は消え去ってしまった。

運命の出会いとは昭和六十三年(一九八八)夏、上那賀町の調査でのことである。我々は民家と社寺の班に分かれ泊まりがけで調査に入った。そこで地元の人に農村舞台が現存するというお話を聞き、半信半疑で目指す東尾の集落に向けて急で険しい山道に車を登らせた。

途中民家は見られず深い谷を窓下に、こんな山深いところに人は住んでいるのかと心配しながら走っていると、ふと目の前が開けて斜面が緩くなり、段々畑に囲まれて民家が軒ほど点在する山里がそこにひっそりとあつた。山の高いところに開かれた、まるで天上の桃源郷のような集落であった。しかしこれも過疎化の波に洗われて、住まいざれていた家は一軒のみであった。本当の「限界集落」であった。その一軒も現在どうなっていることやら。

集落の西のこんもりとした杜の中に目指す神社はあつた。暗い杉林の下を抜けると光射す広場が開けてあり、正面に農村舞台が我々を待っていて静かに佇んでいた。その時の感動はなかなか言葉や文章に出来ないものである。

翌日には拝宮で白人神社、轟神社の舞台を、別の班は川俣の礫神社をそれぞれ「大発見」したと興奮して報告し合うなど、上那賀町では九棟の舞台を発見した。(地元の方々から見れば隠してたわけでもあるまいし発見とは何事かとおっしゃるでしょう)これが平成四年発行の「阿波の農村舞台」へと結実させる、舞台との関わりプロジェクトであった。

このときこの舞台を訪れた四名の中の一人が、その後ほとんど一人で県下の農村舞台を三年間かけて風漬しに調査した森兼三郎さんである。彼の貴重な資料を基に森兼さんと共に犬飼の舞台のある八多町出身で彼の同級生の写真家、西田茂雄さんに撮っていただいた写真で阿波の農村舞台を構成した。編集に携わったのが残りのうちの二人、富田真二さんと私、林であった。

本をまとめている途中のことである。人形座のことを聞きに徳島文理大学に出かけたことがきっかけで人形芝居の公演をこの上那賀町川俣の舞台で開催することができることとなった。調査しているときも、使われることなく朽ち果てようとしている舞台が愛おしく、なにか活用す

るてだては無いかと感じていたところであつたが、訪れた後藤伊都子教授との出会いが思わぬ夢の実現へと導いてくれたのである。

この年、上那賀町教育委員会が白人神社と礫神社の舞台の二ヶ所を町の有形文化財に指定したことが新聞で報じられた。阿波学会の調査報告書で我々が文化財への指定を提言していたことが実つたのである。これを記念してどちらかの舞台で公演をしようではないかと話しが盛り上がり、その場から教育委員会に電話を掛けていた。十月二十九日であった。

冬が迫つて寒くなるため公演日を十二月七日の日曜日と決め準備にかかった。期間は四十日ほどである。これまで数多くイベントをやってきたがこれほど短い準備期間は初めてであった。人形座への公演協力の依頼、企画書を作成し教育委員会に提出、承諾を得る。作業は目白押しである。関連団体や報道機関への後援依頼、チラシと、フレットの制作、地元への説明、教育委員会や人形座との打ち合わせ、案内状の配布・郵送、地元の方々や舞台の修復作業、ふすまからくり練習、そして前日の設営。上那賀町教育委員会やゆずの収穫で多忙期にもかかわらず地元川俣の人々の理解と協力ですべて順調に進んだ。

公演当日は十二月にもかかわらず穏やかで暖かい日曜日となり四〇〇人もの人々が詰めかけてくれた。そして、この人たちの目の前には四十年ぶりに復活した礫神社農村舞台の晴れ姿があつた。

